京都大学数学教室図書室に勤務して

安田（和田）尚子

安田尚子さん（現在の姓は和田）は 2001 年 4 月から 2006 年 7 月までの 5 年 7ヶ月間、京都大学数学教室図書室に勤務されました。以下は安田さんの覚書を基にその詳細をまとめたものです。（2023 年 6 月 30 日）

図書の業務

私は 2001 年度から数学教室図書室に勤務していました。図書室では主に受け入れ業務、目録業務、閲覧・カウンター業務、レファレンス業務などを行っています。これらの業務は、図書館業務のシステム化に伴い、紙媒体での管理からデータでの管理へと移行する節目だったため、多くの変化がありました。

図書の受け入れ業務では、継続図書・注文図書・見計らい図書の購入から登録までの作業手順を行っていました。支払いが終わると、附属図書館から登録番号入りの伝票が送付され、それをもとに図書番号を付け、新刊図書に登録印や数学図書の丸印を押していました。登録が済むと、中央図書室の池村さんに連絡し、入力作業をしてもらっていました。

図書の受け入れ業務は、次のような作業手順で行われていました。

1. 継続図書・注文図書・見計らい図書の購入
2. 支払いが終わると、附属図書館から登録番号入りの伝票が送付
3. 入力用に 1 部コピーをとり、台帳に挟んでおく
4. 「手続き中」のファイルから取り出し、図書番号を書き入れ、図書番号順に並び替える
5. 未登録の図書の書名・著者を照らし合わせて図書番号順に並べる (原本は図書伝票ファイルへ)
6. ゴム印で新刊図書に登録印を押す
7. 登録印の右側に数学図書の丸印を押印し、控えにチェック
8. 全部終わったら、図書室内の戸棚に図書を並べ、チェックした控えの表は「控」のファイルに直す
9. 「登録」のカードボックスから新着の図書分を抜き取り図書番号と日付印を押印し、「受入」のカードボックスに直す
10. 図書番号の登録が済むと、中央図書室の池村さんに連絡し、入力作業をしてもらう

雑誌の購入や到着記録については、2002 年よ r 紙での管理からデータ（ファイルメーカー）での管理に移行しましたが、それまでは電子タイプライターで作成した紙の到着カードに記

入し管理していました。電子タイプライターは事務机に収納されていて、机の天板を引き上げると出てくる仕組みになっていました。

目録業務では、著者別と書名別の紙の目録カードを作成していました。蔵書目録がデータベース化されたので、電子タイプライターでの作成から、受入れ時のデータを用いた紙の目録カード作成に移行しました。データ化されていないものについては遡及入力で登録作業を行いました。

閲覧・カウンター業務では、利用者の確認や貸出し・返却などを行っています。現在のように電子化されていなかったので、理学部の学生には図書利用カードを発行し、入室時にカードボックスへ入れてもらっていました。数学教室以外の教員や理学部以外の学生は身分証明書を預かり、貸出しを希望される場合は、京都大学図書相互利用書を持ってきてもらっていました。貸出しの際には、図書の裏表紙内側につけたポケット内の貸出カード２枚に署名や請求記号を記入してもらい、貸出日を押印し貸出ししていました。貸出中の貸出しカードは、著者順と利用者別で管理し、どの本が貸出し中か、また誰が何冊借りていて、いつ返却期限かがわかるようにしていました。

レファレンス業務では、利用者に図書を尋ねられた時、書名がわかっている場合は目録カードかOPAC、NACSIS Webcatで検索し、論文だけがわかっている場合はMathSciNetで検索をかけ、書名が確認できたら貸出カードで貸出し状況を確認し、案内していました。

図書室では、数学図書のすべてを知り尽くし、先生方から「生き字引」と言われる図書専門職員の阪口さんが、長年お勤めになった図書室を2001年度末で定年退職されることになりました。通常の業務のほかに「図書室始まって以来」とつくさまざまな作業が始まりました。例えば、単行本の分類番号を著者のアルファベット順に並び替える作業や目録カードと全単行本の分類番号付け替え作業、図書・雑誌の移動、図書館業務システム化に伴う遡及入力、などです。当時の主任で図書委員をされていた重川先生と図書委員長の河野先生がほぼ連日来室され、何度も何度も阪口さんと相談されていました。

図書に来られる方々

図書室に来室される方々についても、印象深い方々がたくさんいます。毎週木曜日か金曜日に泉屋のクッキーなど差し入れを持って、お茶に来室されるのが永田先生でした。季節毎に、ご自宅で採れたたけのこや山椒、柿などをお裾分けくださいました。昔はとても厳しい先生だったと伺いましたが、図書室では古切手を見せてくださったり、物の名前の由来を教えてくださる穏やかなおじいちゃんという感じでお話しくださいました。時折話される「センター試験を作ったの自分だよ」というようなエピソードには大変驚き、海外から来訪された先生が永田先生に会われて感激されている姿を目の当たりにしたときには、先生の偉大さを改めて実感しました。慌ただしく過ぎる日々の中で、お茶にいらしてお話を伺えることにホッとさせていただいた日がありました。

他にも、図書を利用される先生方やよく利用される学生の方々は、貸出しだけではなくお話をしに来られました。ちょっと話しかけてみようかな？と思う雰囲気が図書室にありました。出入りされる書店の営業担当の方や製本屋さんもおなじみの方々でした。図書室なのに（閲覧室は中にあったので）、図書事務室は会話が多かったように思います。阪口さんが退職される前には他大学の先生が会いに来られたり、来室される先生方も昔のことを懐かしそうに話されていました。

図書室は数学に携わる方々にとって、研究のために必要な図書を提供する場所であり、多くの思い出や親しみがあります。阪口さんは図書室を守る中で、図書業務だけでなく、声をかけながら先生や学生の方々と関わる環境を築いてこられました。

図書移動作業では、体力を使う作業をたくさんの先生方に手伝っていただきました。また、分類番号の付け替えや並べ替えといった地道な作業や、遡及入力や図書の移動などの作業では、連日学生アルバイトの方々が手伝ってくれました。PC の設定関連では中原先生を初め、ネットワーク管理の方々に大変お世話になりました。さらに、多くの方々が手伝いに来てくださり、図書室の運営にご協力いただきました。

たくさんの方々に支えられ助けられた図書室でした。これからも数学の研究者や学生たちにとって、有意義な場となることを願っています。

阪口さんの思い出

初めて阪口さんと松田さんにお会いしたとき、2 人はモップを持っていました。図書室の 1 日は、始業前の掃除から始まりました。掃除が終わると、お茶を飲んでから前日に返却された図書の処理と棚への戻し作業に入り、通常の業務が始まりました。10 時にはコーヒーを淹れて、15 時にはお茶を淹れていたような気がします。

左から、安田さん、阪口さん、松田さん

昼食はお弁当以外の日は、阪口さんにいろいろなお店に誘ってもらいました。事務室で自転車を借りて、京大周辺のたくさんのお店を教えてもらいました。そして、それぞれの誕生日にはオオマエのケーキを注文して一緒にお祝いすることが恒例行事でした。

お昼休みには吉田山に登ることもあり、思い返せば私たちはとてもアクティブなお昼休みを過ごしていました。阪口さんにはいくつかの名言がありますが、特に印象的だったのは「忘れてくださいね」と言ったら、「忘れることは簡単や！」とサラッと返してくださったことです。その言葉は様々な使い方ができ、今でも考え方を変える際に私を後押ししてくれています。

ある時、梅田先生から図書室がインタビューされた雑誌『MATHEMAPOLITAN（マスポリ）』のコピーをいただいたことがありました。その中で阪口さんが話している姿が、声が聞こえてくるように想像できました。記憶は薄れていくものですが、記録は残るということを改めて感じました。私にとって阪口さんは、図書室でのかけがえのない存在であり、大切な思い出です。